



院長通信



2026年6月 Vol.6

「AIと人間らしさ」

昨今、AI (Artificial Intelligence : 人工知能) が大きな注目を集めています。

コンピューター関連産業はもちろん、一般の工場や店舗、農業や漁業においても、AIを活用した機械や情報システムが導入されています。医療業界でも、画像診断は言うまでもなく、一般外来、ロボット手術、看護分野など、さまざまな領域で応用が進んでいます。



AIは膨大な情報を短時間で学習・集計し、それらを基に思考、予測、判断、行動へとつなげることが可能になってきました。同時に話題となっているのが、「消える職業」です。

アメリカでは、多くの優秀なエンジニアが解雇され始めています。ブルーカラー（肉体労働）に比べ、高給のホワイトカラー（頭脳労働）のほうが早く「消える」という現実です。この現象は、今後さらに世界中へ広がっていくでしょう。

しかし、ブルーカラーが安泰かということ、そうとも言い切れません。AI搭載ロボットは急速に進歩しており、疲れ知らずでミスのない優秀なロボットへ置き換わる可能性があると言われていています。

「多くの人々が失業者となる悲惨な未来」になるのか、それとも「仕事をせずとも豊かに暮らせる楽園」のような社会になるのか、その行方はまだ誰にも予測できません。

そんな中、医療・介護の仕事は、AIには難しい分野だと私は考えています。患者さんや利用者さんの痛み、悩み、苦しみといった、人間の根源に関わる「感情」に寄り添い、優しさや丁寧さ、笑顔で「癒す」ことは、機械やシステムにとって簡単に再現できるものではありません。

私たちは、日々のノルマ（診療・記録業務など）をこなしながらも、感情豊かな「人間」として、患者さんや利用者さんへ「癒し」を届けることが求められています。口で言うほど簡単なことではありませんが、それこそが、私たちに与えられた大切な使命なのだと思います。日々そのことを心に留めながら、歩んでいきたいと思えます。

院長 福田 互